

「2014 年国立台湾大学サマースクールプログラム参加報告書」

京都大学文学部 3 年 内田早紀

①学習成果

台湾大学の中国語の授業では、一クラス 5 人ほどの少人数で中国語の会話等を実践的に学ぶことができた。先生は二人で、最初はその話す速さに驚かされたが、次第に聞き取ることができるようになっていった。学習した文法などはそれほど難しいものではなかったが、発音などは細かくチェックしてもらうことができ、ためになったと思う。先生の発音は大学で学んだ中国語と同じであったように思うが、語彙などは教科書で学んだものとは明らかに異なるものもあった。また、先生以外の台湾の方の発音は、(おそらくそり舌音の関係などで)自分の知っているのとは全く違って聞こえることがあった。他にも簡体字と繁体字、拼音と注音字母など、同じ中国語といっても様々な違いがあることを実際に目にすることができた。このプログラムに参加することにより、自分の中国語に対する関心と学習意欲は一層高まったように思う。

②海外での経験

日本語は当然ながら基本的に通じないため、つたない中国語を駆使して生活することとなった。宿舍の部屋には調理器具等が一切無く、食事は必然的に外食となったが、注文の仕方や会計システム等日本とは異なる事も多く悩まされた。台湾の料理店では注文が記入式の所も多く、中国語初学者としては非常に助けられた。

海外でおおよそ 1 カ月もの間一人で生活するというのは初めての経験であり、初めは不安も多かったが、幸い健康にも何の問題もなく留学を終えることができた。台湾の蒸し暑さは夏の京都以上のもので、当初は冷房なしではなかなか寝付くこともできなかったが、それ以外の点では格別不自由に感じる事もなかったように思う。台湾の交通費は日本と比べ非常に安く、興味のある場所をあちこち見て回るにはうってつけであった。

③プログラム内容

前述した中国語の授業の他、台湾大学では台湾の食文化や音楽、信仰等についての英語による講義を受けた。また、宜蘭や故宮博物館といった場所を訪れて直に台湾の文化について学ぶこともできた。このサマースクールプログラムでは日本と中国大陸からの参加者が大半を占めていたが、カナダやオーストラリアなどからの参加者も勿論おり、改めて英語の重要性を痛感させられた。

④進路への影響について

私の専攻は中国語学中国文学であり、このプログラムを通じて学んだことは中国語学・中国文学を学ぶ上で積極的に利用していきたい。卒業後は就職を予定しており、院への進学は希望していないが、今後も中国語の学習は続け、就職後も何らかの形で活かしていきたいと考えている。